the most beautiful villages in japan

飯豊町
山形県

iide

PROMOTION GUIDEBOOK
山形県飯豊町プロモーションガイドブック

the most beautiful villages in japan

飯豊町
山形県

プロモーションガイドブック

山形県飯豊町総務企画課
〒999-0696
山形県西置賜郡飯豊町大字椿2888番地
TEL.0238-72-2111
FAX.0238-72-3827
URL.http://www.town.iide.yamagata.jp
E-mail.iide-info@town.iide.yamagata.jp

山形県

飯豊町

いいでまち

町の南部を飯豊連峰の懐に抱かれ、
豊かな水源と森林に恵まれた山形県飯豊町。
肥沃な耕地からは、良質な米が生産され、
その田園地帯の美しさは、全国的に知られています。

Landscape 1

田園散居集落

飯豊連峰から流れ出る清流白川は肥沃な扇状地を形成し、流域は豊穣な稲作地帯へと発展してきました。
水田農業を生業とする農家が住み始めた頃から散居定住の形態が進み、農家は、冬期間の厳しい北西風を防ぐため屋敷林を植えて防風や防雪に備えました。この屋敷林は、四季の防風の役割のほかに、その枝を「影切り」と称し、切り落として燃料の不足を補い、また、秋に収穫された稲束の稲掛けとして利用するなど、農村生活の知恵として多様に利用されてきました。農村の営みのなかで長い間風雪に耐え、守り育て、受け継がれた田園散居集落は、町の貴重な景観財産です。

豊かな里山文化が残る中津川地区や、
広大なゆりの花園など、四季折々の美しさが町を彩ります。

Landscape 3

飯豊連峰

飯豊連峰は、磐梯朝日国立公園に位置し、山形県、福島県、新潟県の3県にまたがり、2,000メートル級の峰々が偉容を誇ります。飯豊連峰の山々から流れる清らかな水は、大地を潤し豊かな稲作地帯を形成し、農村文化を育んでいます。飯豊連峰の山容を望む景観は、訪れる人々を魅了してくれます。

Landscape 4

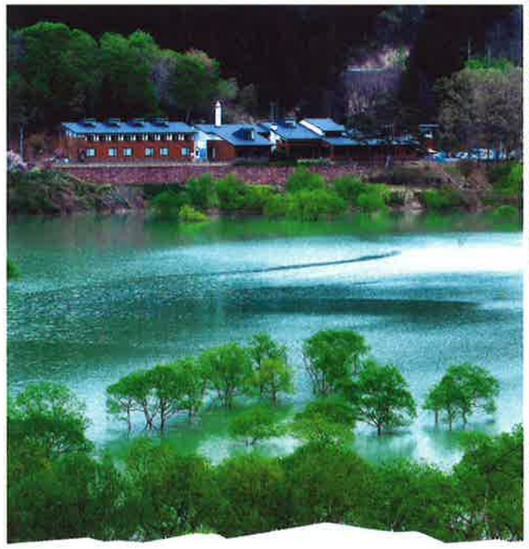
どんでん平ゆり園

東日本最大のゆり園は、7haの広大な敷地に、多品種約50万本のゆりが咲き競う美しい花園。ゆりの香りに包まれながら、色とりどりの花をお楽しみいただけます。

Landscape 2

中津川地区里山景観

中津川地区には、中門造りといわれている民家が残っています。雪国の農家の特徴をもった造りで、農耕馬と農民との暮らしが一体となった生活様式です。民家の周りには、沢水を引いた水路や池があり、雪国に暮らす術があります。草木塔（そうもくとう）という文化遺産があり、草木にもそれぞれ霊魂がやどり、その草木から得られる恩恵に感謝し、伐り倒した草木の魂を供養する心が、草木塔を建てさせたといわれています。この地区には、古より引き継がれてきた菅笠作りやござ織り、伝統的な郷土食があり、いまもなおその文化が息づいています。



最も美しい村で日本

NPO法人「日本で最も美しい村」連合とは

NPO法人「日本で最も美しい村」連合は、平成17年10月に設立、飯豊町は平成20年に連合に加盟しました。失ったら二度と取り戻せない日本の農山漁村の景観や環境、文化を守り、地域資源を生かしながら美しい村としての自立をめざす運動を全国63の加盟町村、地域と共に展開しています。

今、日本各地で、脈々と受け継がれてきた美しいふるさとの風景が消えようとしています。どんなに素晴らしい地域資源も、そこに人がいなければ、守り続けることは難しいのです。

自然と人間の営みが長い年月をかけてつくり上げた本当に美しい日本を未来に残したい、小さくてもオンリーワンの輝きを持つ日本の美しい村を守りたい―

それが「日本で最も美しい村」連合の基本理念です。

連合の目的

この連合は、素晴らしい地域資源を持ちながら過疎にある美しい町や村が、「日本で最も美しい村」を宣言することで

❶自らの地域に誇りを持ち、将来にわたって美しい地域づくりを行うこと

❷住民によるまちづくり活動を展開することで地域の活性化を図り、地域の自立を推進すること

❸生活の営みにより作られてきた景観や環境を守りこれらを活用することで観光的付加価値を高め、地域の資源の保護と地域経済の発展に寄与すること

を目的としています。

the most beautiful
villages in japan

総／合／戦／略

5つの種をまこう

私たちは
「日本で最も美しい村」連合に
加盟しています
「日本で最も美しい村」と聞くと
絵葉書のような美しい風景を
イメージするかもしれません
でも それは違います
人の営み
農山村の生活が生み出した美しさ
昔ながらの祭りや郷土文化
長年の歴史に培われた世襲財産
これらひとつひとつが
「日本で最も美しい村」です
私たちは
失ったら二度と取り戻せない
農山村の景観と文化を守り
先代から受け継いだ
世襲財産を継承し
次世代の若者たちが
働き暮らしていくこと
日本で最も美しい村としての
自立を目指します

私たちは飯豊町の将来を担う
子どもたちのために5つの種をまきます。

1 人材を育成する
人をはぐくむ種

2 住民が笑顔で暮らす
世代をつなぐ種

3 人の流れをつくる
縁をつむぐ種

4 持続可能な農山村を構築する
郷土をたがやす種

5 経済的自立を目指す
可能性をひらく種

土を耕し
種をまき
水を注ぎ
愛情を与え
育てる
5つの種が
蕾となり
花を咲かせる頃
私たちの町は
日本で最も美しい村になっています

1 人材を育成する 人をはぐくむ種

昭和49年に策定した「飯豊町総合計画」の基本理念は「住民主体のまちづくり」。その理念は第4次となる現在の総合計画にも受け継がれています。住民主体のまちづくりの主役は「住民」、「人」です。飯豊町の将来を担う子どもたちに、目標に向かってチャレンジする姿勢や情熱を注ぐ力、学ぶ習慣や学ぶ意志を身につける取り組みを行います。また、若者や女性もまちづくりに参加しやすい仕組みを確立し、一人ひとりがまちづくりに関わることができる環境を整備しながら、人材を育成する「人をはぐくむ種」をまきます。

はぐくむ種

飯豊町立第一小学校

平成28年11月、田園散居集落の景観と飯豊の自然環境に調和した第一小学校新校舎が完成しました。流線形の校舎は、強い西風を背に受け、両手を広げて風を優しく受け流し子どもたちを守ります。大きな窓から差し込む日の光は校舎内を照らし、壁や天井に使われた地元産の杉材からは木の香りが漂います。ここで学び巣立つ子ども達の希望に満ちた将来が、明日の飯豊町をつくります。

教室

多目的教室

体育館

図書ホール

【建物のコンセプト】

■美しい屋敷林に守られた明快でコンパクトな配置
・西風を背に受け、両手をひろげて子どもたちをやさしく包み込む学び舎
・校舎と体育館を一体化したコンパクトな建物配置

■雪に強く堅牢で使いやすい雪国の建物形状
・季節風を受け流す屋根・外壁のフォルム(姿)
・無落雪型の屋根形状と雪や雨から児童を守る雁木アプローチ

■児童が安心してのびのびと学校生活ができる環境づくり
・地場産の杉を多用した温もりある空間
・自然採光を活かした、つどい語りあえるゆとりある空間

■地域の拠点としての施設づくり
・社会開放ゾーンと学校ゾーンを明確にした建物配置
・避難所としての役割を担う高い安全性の確保

はぐくむ種

町営学習教室「いいで希望塾」

飯豊町の将来を担う人材育成を目指し、中学生を対象に、平成27年度にスタートした町営の学習塾です。
英語と数学を重点的に、学校の補充的・発展的な学習機会の提供として、
①学習の習慣
②学ぶ意思
③やればできるという自信
の3つを育む教育を実施しています。

はぐくむ種

音楽からのまちづくり

飯豊町は「音楽からのまちづくり」に取り組んでいます。平成5年、町のイメージソング「めざみ」、翌年には、合唱組曲「ラブリー・ホームタウン～ふるさとに捧げる六つの讃歌～」が完成。町制施行50周年には、合唱組曲「飯豊山～我が心のアルカディア～」、その後、町民の歌「いつも心に」を制定しました。女声合唱団「コラール・ド・めざみ」や少年少女、男声の各合唱団、和太鼓やミュージカル、吹奏楽のサークルなど、住民団体の活動も盛んです。
「めざみの里カンタート」では、世界で活躍する音楽家を指導者に迎え、奥深い音楽表現を学んでいます。音楽を通して、住民参加のまちづくりを進めています。

5つの種をまこう

2 住民が笑顔で暮らす 世代をつなぐ種

幼児期に規則正しい生活習慣を身につけ、心も体も健やかに成長することで、生涯にわたり健やかに老いることができます。また、健やかな子を育てるためには、安心して産み育てる環境の整備と、家族や地域の見守りが必要となります。地域の担い手になる子どもたちと親世代や祖父母世代が世代間交流を図りながら地域の暮らしや食文化を継承し、次代へとバトンを渡すために「世代をつなぐ種」をまきます。

総／合／戦／略

5つの種をまこう

3 人の流れをつくる 縁（えにし）をつむぐ種

全国的な「田園回帰」の流れの中、飯豊町への人の流れを構築するために、最も重要なことは「縁」を大切にすることです。U・Iターン希望者や飯豊町を訪れた方との縁を大切にし、観光と交流を振興します。また、情報発信体制を整備し、移住と定住、観光と交流の「縁をつむぐ種」をまきます。

つむぐ種

なかつがわ農家民宿

雄大な自然の中で、ココロとカダラにホッと一息

日本の原風景と言われる自然豊かな景色と家族のようなおもてなし

ここは風の匂いが違う。人の手のぬくもりが違う。昭和はじめの田舎にいるような感覚

なかつがわ農家民宿組合は、平成18年度、山村留学「里親の会」のメンバーを中心に数名のグループで農家民宿の許可を取得。翌年度、中津川地域で都市部の中学生の教育旅行を受け入れる際に、中心組織として組合を立ち上げました。現在、8軒16名が加盟しています。教育旅行をはじめ、企業研修や海外からのツアー客など、年間1，000名を超える宿泊者を受入れています。

つむぐ種

インバウンド観光

飯豊町は、平成20年度から台湾を中心としたインバウンド観光を行っています。どんでん平スノーパークでの雪遊び、なかつがわ農家民宿への宿泊、イチゴ狩りなど、体験型観光が人気です。中でも1月～2月は、巨大すべり台、スノーモービル、バナナボード体験が大人気です。道の駅「いいで」、めざみの里観光物産館では、山形県初となる「外国人観光案内所」と「免税店」を整備しました。

つむぐ種

高円寺純情コミュニティーカフェ&ショップIIDE

飯豊町が全国に誇る特産品販売をはじめ、地元食材を使った飲食の提供、情報発信の拠点、地方と首都圏の交流促進の場として、オープンしたのが、「高円寺純情コミュニティーカフェ&ショップIIDE」。飯豊町産品の販路拡大や観光促進、人材交流をコンセプトとしたチャレンジイベントを町民の皆様と共に作り上げていきます。

東京都杉並区高円寺北2-7-6
☎03-5356-9922
http://iide-kouenji.com

4

持続可能な農山村を構築する
郷土をたがやす種

持続可能な郷土を創るために、最も重要なことは「地域力」です。飯豊町の礎となる農業の未来を切り拓くための農業改革を実施していきます。また、エネルギーと食、住の地産地消を進め、地域自給と圏内流通、安全で安心な農と食による循環型社会の構築を行います。地域を基礎とした持続可能な農業と農山村の地域づくりのために、「郷土をたがやす種」をまきます。

生産者により大切に育まれ、品質、食味、安全性にこだわって栽培される飯豊のお米

たがやす種

飯豊・農の未来事業

飯豊町の農業の未来を切り拓き、いにしえから育んできた「豊穣の地」飯豊」を未来の子供たちに引き継ぐために、平成25年、「飯豊・農の未来事業」をスタートしました。全国から土地利用型農業の企画提案論文を募集し、2編の最優秀論文に基づき、事業を実施しています。若手農業者の育成や六次産業化に力を入れています。

東京の食卓を彩る飯豊のお米

新規就農者が多く野菜生産も盛ん

木質バイオマス製造施設

家畜排せつ物も堆肥化して農地に還元

たがやす種

地域循環型社会の構築

飯豊町は、低炭素社会、循環型社会推進へ、バイオマスを活用したまちづくりに取り組んできました。地産地消による地域自給と圏内流通の推進はもちろん、総面積の約84％を占める森林を活用するため、バイオマス製造施設を整備し木質ペレット等を製造。地域の森林資源を生かし、地元産材利用を後押ししています。また、有機肥料センターの整備により、家畜排せつ物を堆肥化し、農地に還元するなど、耕畜連携の循環型社会の実現に向けて取り組みを進めています。

町総面積の約84％が森林

5 経済的自立を目指す 可能性をひらく種

農山村が経済的自立をするために最も重要なことは、農山村が持つ新しい価値や魅力、可能性を見出すこと、そして、自然文化と最先端科学技術の両立を可能にする「技術革新」です。これにより、企業が成長し、新しい産業が生まれ、雇用が創出され、地域が活性化します。新しい産業と雇用創出を目的に整備した「山形大学 xEV飯豊研究センター」を中心に産業連携の仕組みを構築し、中小企業の支援を行いながら、農山村が経済的自立をするために「可能性をひらく種」をまきます。

世界の頭脳が集い 最先端科学技術の 未来を拓く

ひらく種

山形大学 xEV飯豊研究センター

平成28年1月、飯豊町と山形大学、山形銀行が連携したリチウムイオン電池の研究開発施設「山形大学xEV飯豊研究センター」が完成しました。同センターは、世界規模で需要が望める高性能、高容量のリチウムイオン電池の研究開発とともに、電池の材料開発から組み立て、性能評価、安全性試験までの全工程を担える施設です。企業との共同研究開発により、具体的な商品化を想定した開発、試作を行います。飯豊町は、自然文化と最先端科学技術が融合したまちづくりを目指します。

三者による連携・協力協定の締結式

電極塗工装置

リチウムイオン電池の製造全工程を担える パイロットプラント

.HOTEL. SLOW VILLAGE IIDE YAMAGATA

ひらく種

HOTEL SLOW VILLAGE

ゆったりと、そよぐように佇む旅荘。
「山形大学xEV飯豊研究センター」の企業研究者や大学関係者、地元住民の交流の場。
屋台村を併設し、コワーキングスペースで未来を語ります。

宿の顔は、町の顔

農家民宿で町を元気にしているお母さんたち。
中津川地区は海外からもお客さんが来るほど注目されています。

山村のお母さんを訪ねておいで

中津川地区で農家民宿が始まったのは平成18年。東北でも有数の豪雪地帯として知られ、遠い昔、車がまだ庶民の暮らしになかった頃は、村で病人が出ると、村人たちが一致団結して、病院のある集落まで峠を越えて担いでいったという。まさに隣近所の協力なくしては生き残れない村だった。あまりの雪深さゆえ、一度訪れたら簡単には帰れない、必然的に泊まらざるを得なかった土地柄ゆえ、旅人やよそ者に対してもフレンドリーな気質なのが中津川地区の人々の特徴だ。「以前から山村留学で、埼玉や東京など首都圏からのお子さんを最長で1年、家で預かって学校に通わせる里親経験をしてきたこともあって、民宿を始めることへの抵抗はもともと低かったですね」と、農家民宿の女将たちは言う。

家で冠婚葬祭を執り行っていた名残りから、どの家にもお膳やお布団が20組はあるのが当たり前で、玄関は鍵をかけずにつねにオープン状態。人里から離れた辺鄙な場所だから、この地を訪れた人は泊まっていき、長い夜をじっくり語り合う。厳しい冬の気候ゆえの要素がうまく重なって「農家民宿」という形になったのも、必然と頷ける。

中津川地区の農家民宿はそれぞれが、料理、体験メニューなど各宿独自の個性を打ち出している。どのお宿にも共通するのが、「山菜料理」。テーブルいっぱいに、ワラビやぜんまいの煮物、青菜(せいさい)漬け、玉こんにゃくの煮物、手作りのゆべしなどの手料理が、「10時のおやつ」として並べられる。和やかにおしゃべりが進むなか、「あがれ、あがれ(食べて、食べて)」と気持ちよくすすめてくれるので、朝ご飯をたくさんいただいた後でも、ついつい、箸が進む。高菜の仲間である青菜を漬け込んだ山形を代表する「青菜漬け」は、ザラメを使いほんのり甘く仕上げているのが特徴。おむすびに巻いたり、白いご飯のお供に最高に合うお漬物だ。

おばあちゃんが菅笠づくりを教えてくれます

宿の料金についてはおおまかな取り決めはあるものの、提供するメニューについては自由。どの宿でも、地元で採れる山菜とヤマメは欠かせない。それぞれがお料理については技を持っているため、講習会を開いたり教えてもらったレシピを元に挑戦してメニューに取り入れたりしている。

ちなみに、農家民宿の中には、築200年の古民家を改修したお宿がある。天井が高く広々とした家の中は、養蚕が盛んだった時代をしのばせる。家の前に水車が回り、縁側から望める雄大な飯豊連峰の景色も魅力のひとつ。7月には小川にホタルが乱舞する姿も楽しめる。また、ヤマメ料理一筋のお宿も。新鮮なヤマメを使った刺身やお寿司、てんぷら、甘露煮など、工夫を凝らした様々なヤマメ料理が味わえる。山野草が趣味のご主人が、その栽培法などを教えてくれることも。

農家民宿を利用する客層は、比較的年齢層が高めで、ホームページを見て、全国はもとより、台湾やタイ、香港からも訪れる。「特に海外からのお客さんは囲炉裏で食事をすることが珍しいので、とても喜んでくれます。会話は、漢字の筆談で通じることもあれば、タイになると言葉もお手上げ。だけど、『美味しい』『ありがとう』『No.1』などの言葉は、皆さん覚えてきてくれるので、どうにか最低限は伝わっているかな。最後は『どうにかなる!』の精神ね」と、女将たちは微笑む。

台湾や香港では雪が珍しいので、中津川地区の豪雪は特にとびきりの魅力に映るのだとか。「雪の壁の中にローソクを灯す、『灯の回廊』の演出をした時は、家の灯りをすべて消して、囲炉裏を囲みながらガラス越しに映ったローソクの幻想的な炎を眺めました。ここに住んでいる私でさえ、あらためていい所だなぁと思ったほど」。

今や海外からも、宿泊に来るお客さんでにぎわうようになった中津川地区。もっとたくさんの人に来てもらうというよりは、身の丈にあった今くらいのペースがちょうどいいのかもしれない。

「自分たちの集落を、どうにか盛り上げていきたい」。そんな思いから始まった中津川地区の人々の挑戦はこれからも続く。

中津川地区に自生するひめさゆり

FEATURING IIDE'S HISTORY

東洋の桃源郷（アルカディア）

19世紀、英国人女性旅行家イザベラ・バードが訪れた飯豊町手ノ子。彼女が賞賛した風景は、今なお引き継がれ、訪れる人を魅了します。

鍬で耕したというより鉛筆で描いたように美しい「実り豊かに微笑する大地」

明治11年、「ほんとうの日本を見るため」、一人の英国人女性が横浜に上陸した。名はイザベラ・バード。彼女は、人力車や馬を乗り継ぎ、西欧の影響を受けていない〝日本の奥地〟へ歩みを進めていく。

彼女が山形県南部、置賜地方に入ったのは7月13日。梅雨時ゆえ雨に降られ、険しい峠をいくつも越えた後だけに、夏の光を浴びながら米沢盆地を見下ろし、安堵のため息をついたに違いない。

彼女が帰国後にまとめた著書『日本奥地紀行』の中で、この地を「実り豊かに微笑する大地であり、東洋のアルカディア（桃源郷）である」と、賞賛している。それは、彼女を引き付けてやまなかった美しい日本の農山村そのものと言えるだろう。彼女を感動させたのは、荒々しい原初の風景というより、人間がこまやかに手を掛け、隅々まで人間の思いが行き届いた風景に違いない。

彼女を感動させたのは風景だけではない。彼女は著書の中で、手ノ子での出来事をこう記している。「家の女たちは、私が暑くて困っているのを見て、うやうやしく団扇をもってきて、まる一時間も私をあおいでくれた。料金をたずねると、少しもいらない、と言い、どうしても受けとらなかった。彼らは今まで外国人を見たこともなく、少しでも取るようなことがあったら恥ずべきことだ、と言った。」

越後米沢十三峠

彼女が訪れた手ノ子地区は、国道113号沿いにある集落で、古くは越後米沢街道といって、山形の置賜（おきたま）地方から新潟県へ通じる旧街道の宿場町として栄えた。飯豊町や米沢を含む置賜地方では、かつて、青苧（あおそ）という多年草の生産が盛んに行われ、青苧は、越後・小千谷地方の小千谷縮など、高級織物の原料として、大変重宝された。その青苧をはじめ、置賜地方の産物を新潟へ輸送するために活躍したのが、十三の峠からなる越後米沢街道。中でも、特に難所と知られる険しい宇津峠の頂上を越え、彼女の目に飛び込んできたのが見渡す限りの美しい米沢平野だった。彼女が訪れたのは梅雨のまっさかり。おそらく、その晴れ間に見えた米沢平野の美しさは、旅の疲れを忘れさせるくらいの感動だったのかもしれない。

昭和55年に誕生した手ノ子区協議会は、住民による「地域課題の協議」と「地域づくり活動」をテーマに活動しており、宇津峠部会をはじめ5つの部会と委員会をもうけ、地域住民の手で魅力的な里づくりに取り組んでいる。宇津峠部会では、峠道の復元と維持管理、歴史の調査、情報発信など、真面目な中にも遊びの要素を入れながら活動している。

地域住民で行なう峠道復旧

かつてバードが通ったと考えられる金世道

iide
YONEZAWA BEEF
牛

飯豊の豊かな風土と伝統が育んだ日本黒毛和牛トップブランド 米沢牛

米沢牛発祥の地　飯豊町

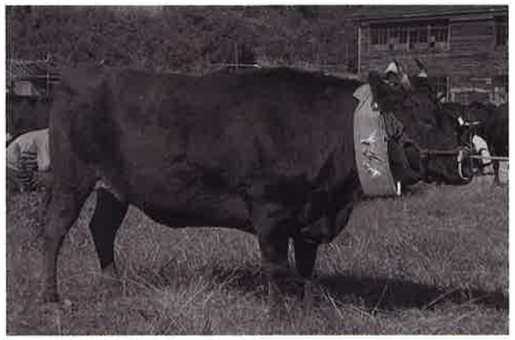
YONEZAWA BEEF
What's
米沢牛とは

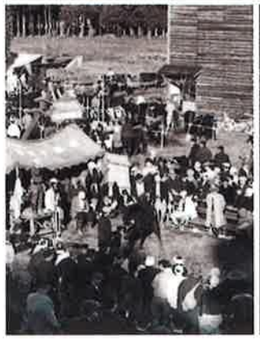
米沢牛とは、米沢牛銘柄推進協議会が認定した飼育者が生産する生後月齢32ヶ月以上の黒毛和種の未経産雌牛です。また、公益社団法人日本食肉格付協会が定める3等級以上の外観並びに肉質及び脂質が優れている枝肉であることなど、厳しい条件を満たしたものだけが「米沢牛」として認められます。広い自然の中で育てられる、柔らかく脂の乗った上質な肉質は、焼いても良し鍋物にも良しの、どんな料理とも相性が抜群です。

「米沢牛」は、平成29年3月3日、「特定農林水産物等の名称の保護に関する法律」に基づき、「特定地理的表示（GI）保護制度」に登録されました。「米沢牛」のブランドが保護され、更なる知名度向上と販路拡大が期待されます。

YONEZAWA BEEF
Origin
米沢牛のはじまり

江戸時代、米沢藩9代藩主 上杉鷹山は、藩校「興譲館」を開校しました。その興譲館で明治4年から8年までの間教鞭を執ったチャールズ・ヘンリー・ダラスという人物がいました。ダラスは故郷を懐かしみ、四つ足の動物は食べないとされた米沢の地で牛肉を食べたのが、食用としての米沢牛のはじまりだと言われています。その美味しさに感動したダラスは、任期を終え、米沢をはなれる際に、飯豊の牛1頭を横浜に連れて帰りました。彼の友人たちは、その牛肉の旨さを口々にほめ讃え、「米沢牛」が全国に広がるきっかけとなりました。そして現在、「米沢牛」は屈指のブランド牛として全国的に認知されています。





YONEZAWA BEEF
Secret
食べた時に感動を味わえる類い稀な牛肉の美味しさの秘密

牛は、育つ環境や餌などの些細な変化によって、肉質や脂質に影響が出る繊細な動物です。良い牛が出来るのは、血統5割、餌3割、環境2割といわれており、中でも食べさせる餌には特に気を使っています。肥育農家は自らの水田で米を作り、副産物として、稲わらも収穫します。稲わらの他に大豆、大麦、とうもろこし、フスマ等の良質な餌を独自ブレンドで配合し牛に与えます。また、米ぬかを少量与える事により、旨味のある脂質を作り上げます。

YONEZAWA BEEF
Harmony
自然の恵みと、生産者の愛情が調和して生まれる豊かな味わいの「米沢牛」

米沢牛のふるさとは、山形県の南部に位置し、四方を朝日、飯豊、吾妻、奥羽の山々に囲まれた置賜盆地にあります。その中でも、飯豊町は約4割を生産する「米沢牛」の主生産地です。飯豊連峰を源流とする清流白川の水脈と、緑多き自然は肉牛の成長に欠かせない恵みとなります。雪に覆われる極寒の冬と湿気高い暑い夏。繰り返しおとずれる自然の厳しさは、人もそして肉牛をもたくましく磨きあげてくれます。自然の恵み豊かな環境と、それを最大限、無駄なく生かす努力との融合が「米沢牛」の質の高さの秘密にほかなりません。

iide SPECIALTY FOODS

食

作り手の熱い想いと飯豊の自然の恵みを感じる逸品

1 米

飯豊町で生産される米は、つや姫、はえぬき、コシヒカリなど。「つや姫」は、甘み、うまみ、艶などに優れているとともに、それらのバランスが絶妙であり、口に入れた時に広がる甘みと香り、粘り気が人気です。また、お米の白さや炊き上がりのつやなどの見た目にも定評があります。平成30年からは新ブランド米品種「雪若丸」がデビューします。

2 わらび

山菜の宝庫、飯豊町の名産品のひとつ“わらび”。きれいな水と豊かな大地に育まれた、独特のぬめりと、山菜ならではの香りやほろ苦さなどの味わいを愉しめます。

3 雪室あまみ芋

愛を込めて、丁寧に育てられた、じゃがいもを、収穫後、天然の雪を活用した巨大冷蔵庫「雪室」で長期貯蔵。雪室内は、温度2度、湿度99%と一定なために、雪が生み出す適温と湿度によって、じゃがいもは低温糖化し糖度を2倍以上に高め、糖度10度以上の甘〜い甘〜いじゃがいもに変身します。そのまま蒸かしただけでもおいしく食べられます。

4 放牧酪農牛乳

飯豊連峰を見渡せる「飯豊町ながめやま牧場」。約400haの広大な草地を牛が動きまわり、大地が育んだ牧草を食べて、のんびりゆったり暮らす牛たち。そんなストレスフリーの牛から取れる生乳は自然の美味しさがたっぷりです。その牛乳を使用したアイスクリーム、ソフトクリーム、ヨーグルトは、ミルク感を味わえ大変好評です。

5 アスパラガス

飯豊連峰を源流とする清流白川の流域に広がる肥沃な大地と昼夜の寒暖差が育む栄養豊富で濃厚な甘みの飯豊産グリーンアスパラガス。県内有数の生産量を誇ります。朝採りのみずみずしさは格別です。

6 宇津沢かぼちゃ

宇津沢かぼちゃは、中津川地区宇津沢集落だけで栽培されている、約100年前から種を守り続けてきた伝統野菜。そのおいしさから大変な好評を得ています。希少価値が高く、収穫の時期には予約注文が入るほどです。

7 こくわワイン

こくわ100%は飯豊町産のこだわり。酸味と甘みがあり栄養豊富なこくわの実（さるなし）を100%使用し、フルーティーに仕上げた甘口タイプのワインです。2014年、JTB「日本おみやげアカデミーグランプリ(飲料部門)」で金賞を受賞しました。

どぶろく饅頭

どぶろくケーキ

8 どぶろく

平成16年、飯豊町は「東洋のアルカディア郷再生特区（どぶろく特区）」を取得。大自然が育んだ「酒米」と繊細な「仕込み」が生む伝統的な気品のある味わいです。現在は、3つの酒蔵で作られていますので、お好みの味を見つけてください。

9 秘境の湧き水

飯豊山系の地下岩盤水脈から湧き出る天然水で、水質は極めて高く、透明に澄みきっています。国内有数のミネラル分含有率を誇る、秘境の湧き水です。

伝

祈りと願いが込められた受け継がれる飯豊の文化

【ししまい】獅子舞

飯豊町を代表する伝統文化獅子舞。それぞれの地区の人々により保存伝承され、その勇壮な舞いを現在に伝えています。特に、町指定無形文化財「諏訪神社神輿渡御行列」は、その起源が300年前の享保年間と言われ、永い歴史の中で守り伝えられてきました。

【そうもくとう】草木塔

飯豊町、そして置賜地方には、草木塔（そうもくとう）という文化遺産があります。草木にもそれぞれ霊魂がやどり、その草木から得られる恩恵に感謝し、利用した草木の魂を供養する心が、草木塔を建てさせたといわれています。自然の大切さや草木に対する慈しみの心が込められています。

【すげがさ】菅笠

山形を代表する夏のイベント「花笠まつり」。このお祭りに欠かせない花笠は、その多くを中津川地区のおじいちゃんやおばあちゃんたちが作っています。雪の多い中津川地区では、農作業などで使われてきた菅笠を冬期間の仕事とし、昭和38年頃から花笠まつりに毎年提供してきました。

Recommended spots

おすすめスポット

農家レストラン エルベ

地元の食材との素材を使用したパスタ、石窯で焼き上げる本格ピッツァが人気の農家レストラン。前庭に広がるハーブ園を眺めながら、本格イタリアンをお楽しみいただけます。

飯豊町大字萩生3549-1 ☎0238-86-2828

広河原温泉 間欠泉 湯の華

日本でたった一つの入浴できる間欠泉。金茶色の湯花堆積地から、5〜30分の間隔で噴水を上げる炭酸間欠泉です。運が良ければ、高さ10mも噴出する瞬間を見ることができます。自然の神秘と力に魅せられます。

飯豊町大字広河原字湯ノ沢448-2 ☎050-5534-3431

がまの湯温泉 いいで旅館

その昔、傷ついた「がまがえる」が湯に浸かり傷を癒したことから発見された「がまの湯」。赤ちゃんから入れる湯あたりの少ない肌に優しい単純泉。かえるは卵を沢山産むことから、子宝恵み子孫繁栄を祈願し「蝦蟇大権現」を祀っています。

飯豊町大字椿4494 ☎0238-72-3706

めざみの里観光物産館

日本海と太平洋を結ぶ国道113号に位置し、飯豊町ならではの味覚や文化に触れることができます。季節ごとのイベントも目白押し。隣接する「観光いちご園」でのいちご狩りも人気です。

飯豊町大字松原1898 ☎0238-86-3939

賑

人々が集い、笑顔が生まれる
まちを元気にする熱気と賑わい。

1

荒獅子まつり

毎年春から秋にかけ町内各神社において、300年以上前から、農作物の五穀豊穣・無病息災等を祈願する農村文化の伝統として、「荒獅子まつり」が繰り広げられ、大切に守り育てています。「荒獅子まつり」の由来は、集落の若者が長蛇になって暴れ舞う獅子と、ムラ一番の力持ちが力比べを行うところから来ています。各神社の例祭日には、獅子が各地区の氏子を練り歩き祓い清めます。

3

中津川雪まつり

ライトアップされた巨大な雪像が並び、冬の空に打ち上げられるスカイランタンは、会場を幻想的な空気に包みます。

2

めざみの里まつり

9月第一土曜日。「健康」「交流」「創造」をテーマとする町民の祭典。町民総参加の「めざみの里WA踊り」がフィナーレを飾る。

6

いいで黒べこまつり

満開のゆりが咲く中で味わう飯豊産米沢牛には、言葉が出ません。主産地ならではの最高級の米沢牛を堪能できます。

5

全国白川ダム湖畔マラソン大会

毎年5月、残雪の中に咲く山桜とブナの新緑の中で開かれるロードレース。2kmからの各コースでゴールを目指す。

4

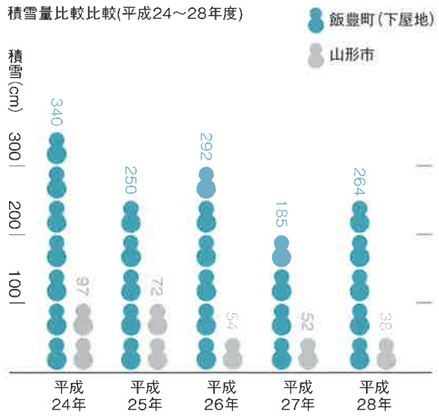
SNOWえっぐフェスティバル

豪雪を逆手にとった「真夏に雪であそびましょ」がコンセプトの夏まつり。雪上スイカ割り等、様々なイベントが楽しめます。

暮

雪が降るほど、絆が深まる。人々の知恵を活かした雪との暮らし。

飯豊町は豪雪地帯です。雪がとても多い町です。山間部にある中津川地区では、積雪が3mを越え、一晩で1mも雪が降ることがあります。雪深い冬を越えるからこそ、出会える春があります。でも、子ども達は、そり遊び、スキー、雪合戦など、雪を体感し、雪と共に成長します。



平成24～28年の最大積雪深の平均
飯豊町(下屋地)……266.2cm
山形市……62.6cm

暮らす

雪が多いシーズンは、何回も何回も雪おろし

安全な通行のために欠かせない道路除雪

雪と炎 子どもたちの手づくりランタン

遊ぶ

思いっきり雪遊びができる超レア体験。スノーモービル乗車や、スリル満点のバナナボートや高低差20メートルの雪上巨大滑り台。スノーシューは、約7ヘクタールの広大な面積を有するゆり園内を歩いて散策できるようになっています。

どんでん平スノーパーク 飯豊町大字萩生3341 ☎0238-86-2411

活かす

雪室は、天然の雪を利用した巨大冷蔵庫。貯雪作業は2月から3月に行われ、保管した雪は、次の冬まで融けません。温度、湿度が一定に保たれ、農産物や米、酒の長期貯蔵に利用される、自然の雪を活かした農山村の知恵です。

いいでの歴史

自然の恩恵を受けながら独自の文化を育んできたまち。

1958

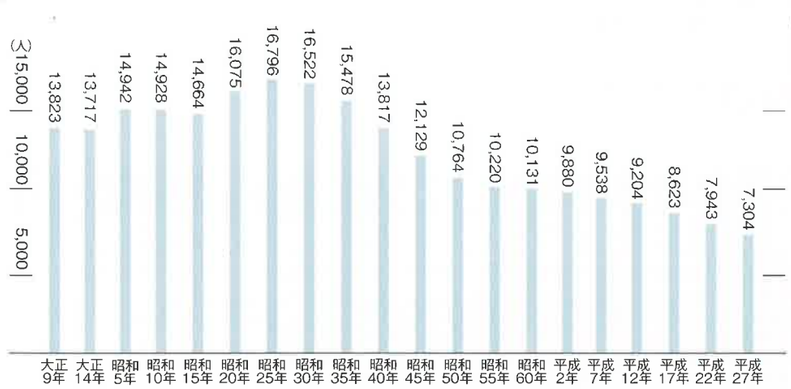
- 昭和33年　飯豊町誕生　飯豊村に中津川村が編入合併
- 昭和38年　三八豪雪
- 昭和39年　飯豊町町章制定
- 昭和42年　町制施行10周年　羽越水害　国道113号宇津トンネル開通
- 昭和45年　過疎地域指定を受ける
- 昭和49年　飯豊町総合計画策定
- 昭和50年　国道113号全線開通
- 昭和53年　町制施行20周年　町の花「ゆり」　町の木「もみじ」制定　飯豊音頭制作　中津川小学校完成
- 昭和54年　役場庁舎椿地区に新築移転
- 昭和55年　白川ダム完成　町民野球場完成
- 昭和56年　手ノ子小学校完成
- 昭和57年　国道113号添川バイパス完成　自然環境活用センター「白川荘」オープン
- 昭和58年　添川小学校完成
- 昭和59年　農村計画研究所完成
- 昭和61年　さゆり保育園完成
- 昭和62年　新飯豊町総合計画策定
- 昭和63年　町制施行30周年　町民憲章制定
- 平成2年　いいで添川温泉「しらさぎ荘」完成　町民総合センター「あ～す」完成
- 平成3年　飯豊中学校完成

2017

- 平成4年　べにばな国体「山岳競技」開催
- 平成5年　田園散居集落が「第1回美しい日本の村景観コンテスト（生産部門）」で農林水産大臣賞受賞　町イメージソング「めざみ」制作
- 平成6年　合唱組曲「ラブリーホームタウン」発表　国道113号新宇津トンネル開通
- 平成7年　第10回農村アメニティコンクール最優秀賞受賞
- 平成8年　千葉県千倉町（現南房総市）と友好都市締結
- 平成9年　道の駅「いいで」　めざみの里観光物産館オープン
- 平成10年　町制施行40周年
- 平成11年　ホテルフォレストいいで　木湖里館オープン
- 平成12年　農家レストラン「エルベ」オープン
- 平成13年　第3次飯豊町総合計画策定　つばき保育園完成
- 平成15年　どんでん平ゆり園　リニューアルオープン
- 平成16年　「東洋のアルカディア郷再生特区」認定
- 平成17年　第二小学校完成
- 平成18年　新飯豊橋開通　健康福祉センター　介護老人保健施設「美の里」開所　いいで天文台オープン
- 平成20年　町制施行50周年　新合唱組曲「飯豊山～我が心のアルカディア～」発表　NPO法人「日本で最も美しい村」連合加盟
- 平成21年　バイオマス製造施設完成
- 平成23年　第4次飯豊町総合計画策定　町民の歌「いつも心に」制定
- 平成25年　中津川小中学校閉校　県立置賜農業高等学校飯豊分校閉校　林道「飯豊桧枝岐線・一の木線」開通
- 平成26年　「高円寺純情コミュニティーカフェ&ショップIIDE」開店
- 平成27年　山形大学xEV飯豊研究センター完成　「飯豊 農の未来事業」着手
- 平成28年　認定こども園「飯豊わくわくこども園」オープン　第一小学校完成
- 平成29年　埼玉県桶川市と友好都市締結

IIDE PROFILE

総人口の推移



町の花／ゆり

昭和53年11月1日制定
町内では白く大きな「山ゆり」、ピンク色の可憐な「ひめさゆり」が代表的。純粋でぬくもりにあふれた町民の心を象徴する花です。

町の木／もみじ

昭和53年11月1日制定
新緑や紅葉の頃、わたしたちの目を楽しませてくれます。幼児の手のひらに似た葉の形は思いやりと優しさを象徴しています。

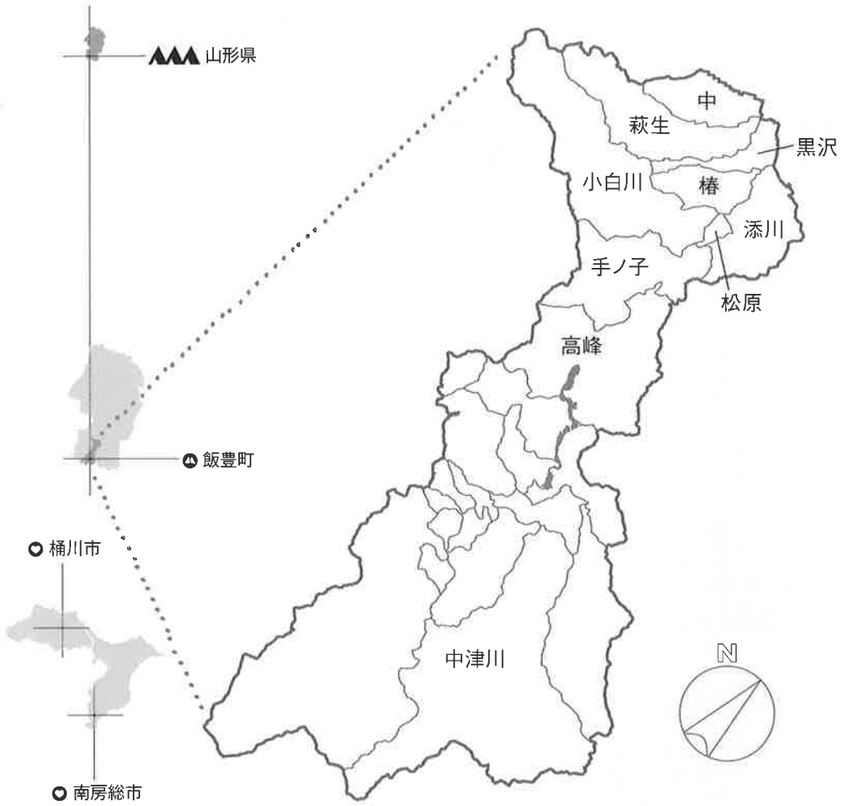
友好都市

①千葉県南房総市（旧千倉町）

平成8年11月24日、千倉町と友好都市調印
昭和49年、千倉町長が本町を視察したことをきっかけに、千倉町七浦小学校と飯豊第一小学校の交流が継続。
長年の子ども達の交流が友好都市に発展しました。
＊平成18年3月、富浦町、富山町、三芳村、白浜町、千倉町、丸山町、和田町が合併し、南房総市となりました。

②埼玉県桶川市

平成29年2月25日、友好都市調印
平成16年、中津川むらづくり協議会が取り組んだ山村留学をきっかけに、「桶川全国ふるさとまつり」と「中津川雪祭り」の相互訪問など交流が継続。
地域間の交流が友好都市に発展しました。



交通アクセス

飯豊町

鉄道のご利用

- JR米坂線 40分 → 米沢
- 山形新幹線 2時間20分 → 東京から
- JR米坂線 10分 → 今泉
- 山形鉄道フラワー長井線 20分 → 赤湯
- JR奥羽本線 40分 → 山形
- JR仙山線 1時間 → 仙台から

お車のご利用

- 国道113号 30分 → 赤湯
- 国道13号 15分 → 米沢
- 国道13号 50分 → 福島飯坂IC
- 東北自動車道 3時間 → 東京から
- 国道113号 30分 → 赤湯
- 国道13号 30分 → 山形
- 東北自動車道・山形自動車道 1時間 → 仙台から

the most beautiful villages in japan

飯豊町
山形県

iide

PROMOTION GUIDEBOOK

山形県飯豊町プロモーションガイドブック

the most beautiful villages in japan

飯豊町
山形県

プロモーションガイドブック

山形県飯豊町総務企画課
〒999-0696
山形県西置賜郡飯豊町大字椿2888番地
TEL.0238-72-2111
FAX.0238-72-3827
URL.http://www.town.iide.yamagata.jp
E-mail.iide-info@town.iide.yamagata.jp